



寛
濶
伊
達
鑑

U 5
2305



門 伊 5
番 230
卷

寛洞修建遊巻の目録

任達叔由諸事附田村氏略譜事

子爵之夏海忠定卒去事兼任達宗務事

系田輝之而事附系田甲斐系之叙一末洞分の事

新東京之夏海村江府の海況事

宗室傳記之夏海宗務系田系後の事

系尾渡田林送之夏海東の林産と世活の事 兼追記の事

系尾牙法宗的の事 附海定系の叙上遊洞の事

任達安藝所倉下所宗活の事附安藝妹湯系子叙の事

系尾渡田重定傳系田甲斐系計の任達安藝所叙の事

系尾渡田重定傳系田甲斐系計の任達安藝所叙の事

系尾渡田重定傳系田甲斐系計の任達安藝所叙の事

系尾渡田重定傳系田甲斐系計の任達安藝所叙の事

系尾渡田重定傳系田甲斐系計の任達安藝所叙の事

系尾渡田重定傳系田甲斐系計の任達安藝所叙の事

明治三十九年十月十五日
山田市郎氏寄贈



一々二君と忠と依 孫不実日中智臣の陸一は也子孫とく
く堂 友系氏多三度著く世乃人の効る可く家子奥列也老の
城主伊連大系を友系の子政とす、海島は次男房崎の大良と
七代山陰中綱云以朝之乃嫡孫十世の土岡藏人朝宗也平陸国中
村住居せり其子常陸少意西と嫡子為宗次男為重三男祐綱
は男為兼伯也と秀一常子一伯と文治五年の秋や大將頼朝と来
列征伐の如伊連政次河村世也と彼一政功政度と及ひし
奥列は羽平均の後長西元の軍とを以て一は伊連政と有りし
政為宗九代の孫大佐を夫政宗也史兼はの良將とす、羽の由
長井の庄近切陸一と城と築是より移る城本沃城と号を
今此庄沃のり一政政宗は代の孫其孫を備成宗也とせり

將軍義高云 湯 ありて後河内村今石津の山中と海と形
海 都 ありて名残と波とありて海とも

むらさきのとありて

平後宗植宗晴輝宗と書ふるは建宗の内室は羽列山形山城に
宿上修理大輔義守の息女とす、建光の妹は内室永海平年
卯八月二日土羽國長井庄津澤城中移る男子誕生とす、此童は
梵天丸と名付、此梵天丸誕生の事、付種々の説あり、
るあり、其友系下きた天正九年二月梵天丸一歳とす、元後伊連
夜次郎政宗と改名せし、是先祖政宗の英雄とあり、此の心く
名を因村大佐是地土流顯の息女とあり、是列良宗の母也、
一 因村大佐のり、後湯津院殿とせし、今一 中羽人

石原宗時三子世三男安後孫松丸返中兵助と云
明應二年六月九日父秀宗の讓と後大膳を父宗利と号せ
是列中御云伊達政宗の孫之令言子小次郎安後と号す
後より後より守中備前孫と改名右方名の内二方不配ふ左田
とふふは後を列政宗の孫之政宗は乃長男秀宗と伊達
家の家督とせざる。まはは秀宗と伊達の人傑とて久安大坂の
城内へ居む候。大神君の思ふも之と押斗り次男忠宗を
家督とせしめ候。大神君を忠と名成しに威の八利
一拾万とあり並れとあり。守二女田止前の上阪と
大神君才九番めの子の敏波女將以半上佐分忠建之の河原中後
西領及と号す。寛文元年二月八日遊去才三の忠宗は田村宗の

伊達長長元年己巳誕生童名と友次郎後右邊御少將山門宮ハ
池田之八郎村越政之の山目宗也守に伊達に内守宗治の城主成六
伊達之河守宗安若山の城主才七の伊達範房宗法若守の城
守才八の伊達九守也才九の伊達右衛門守宗守村田城主才十の女
石川氏宗守宗光内守 大神君宗也 才十一の伊達治政丈夫宗美是也
伊達女房守政宗の書子直理の城主才十二の伊達三浦少輔宗精
一岡の城主才十三の女系松丹後守高玉の内室之左後政宗之孫
孫の女寛政八年成秋の三月八日番清治と一教松田分と宗長
孫と云ふ一城と號す。仙臺の善村と云ふは宗守所也
宗守の孫と宗守の孫と云ふは宗守の孫と云ふは宗守の孫と云ふは
成る。宗守の孫と云ふは宗守の孫と云ふは宗守の孫と云ふは
寛永十三年 二月 月 日 宗守の孫と云ふは

此是之く江戸へ登り別所を謀 中興は首孫孫古所野郎之
く劍・猪毛は獲藤ふふく上下をめれ御ひりる。右國は月有
より去れし月初に方病癒まく一故に也 上段十道一書
同十二日 將軍家元云前く也 御見奉るくも 所成難 所成
云此 上云はくもか之は後医師 瘧所と伝事と九次書も書
御 六月十日の由より七年某より一卒去別指くくも仙居道
産空藏山の飛高十敷塔とくくも六月十二日此書道より
中後様ハ之川氏取れ馬ハ赤田中變之御戒名瑞鳳寺殿若葉山員
山利公ハ赤之敷西のトノ以宗中瑞とくもと獲金のりも此也
任持ハ物ハ書形為ハ信後 松清瑞高の任持と升る信之
信風と下云若神為者任寛延二年己巳正百中某年子故

権假攝 所目是有同十一年辛亥十二月十日 將軍秀忠云
於所若元後出所分從は信下も知 大信書も信れ
所清のとき富知天下忠宗と稱も後元和二年丁辰十月十日持
從子叙 寛永元年甲子正月十二日哉前守と改む同二年丙寅八月
十九日左近衛權少將も信也是國六年己巳正月十日陸奥守と改む
家元ハ 兼徳ハ二代の將軍も勅は信也信造家ハ信以の支
百信首 東照宮御自筆少く 故宗ハ百石名也信三の
御神文御世利ハ 重也くも也天下止一統の後生也信也
信之由也くの將軍家 稱中も信也信也信也信也信也
陸奥守忠宗の志也信也信也信也信也信也信也信也信也信也
及之不也信也の勝くも信也信也信也信也信也信也信也信也信也

折神以東者... 世倭の五國... 大神者... 家光... 河と相強...

大神者... 折神... 大神者... 折神... 折神...

折神... 折神... 折神... 折神... 折神...

折神... 折神... 折神... 折神... 折神...

折神... 折神... 折神... 折神... 折神...

折神... 折神... 折神... 折神... 折神...

折神... 折神... 折神... 折神... 折神...

折神... 折神... 折神... 折神... 折神...

折神... 折神... 折神... 折神... 折神...

折神... 折神... 折神... 折神... 折神...

折神... 折神... 折神... 折神... 折神...

流歌の生かぬ亡父の迷河と云々
防来博也を以て内山平といはる者
何のりり人とはいふ人接打の者
注酒とを先を家とらうとす
孫と頼されりる

新吉原之度附中村に罪海元と云々

受長ふ来一実テ赤洲流の後大小名あり
清と酒具控也と好く傾城控衣
一也。岡分危はる
御一我の後天下群衆
流歌を以て今系勤の諸大名曰此と云

いづくも作らばうつ系代情
禁制せしむるなり下下子系勤
了らぬまうり
制也。下下下下下下
走り。偲々次才の禁昌
あはれ。是風を分て
く。並り形
吉原の事
女女の事
凡そ々の事

西の月吉東傾城下と清平と小塚東の石二谷と之を移さるる
長持女と友交は海止らやとてそか山石川の山崎ゆき侍伊達並
作中とてあり

没す白今の神田川の上平建御門の下方へ清治基下通う空堀板敷の
住業と自中とてせしき体とて去成排とて貸さる更之日産の若
た中今とて合子込山とてまゝとて伊達家の役人勤略めらぬとて
記をた編宗とて同ひりて編宗の田くけとて多様とて編宗と
送すこととて移り初めとて更とてまゝのひりてこと

編宗と小石川は清治場と柳と也方と也廻とてふとてまゝ之風とて
まゝ天のやうとて清人の年月とて移せり故とて伊達様とてまゝとて
有財真山とてまゝ有住家とて酒とて酒とてを先以研とて移せ

因ひ是れ水の方とて南とて無昌也世とてまゝとて新吉東とて年の
ゆきとて彼地里とて世とて移せりとて因とて移しとてまゝとて元成里とてま
云丸の地里とてゆきとて移せりとてまゝとてまゝとて伊達家の役人のま
とて編宗とてまゝとて移せりとてまゝとてまゝとて移せりとてまゝとて
伊達家の役人のまゝとて移せりとてまゝとてまゝとて移せりとてまゝとて
ゆきとて新吉東とてまゝとて移せりとてまゝとてまゝとて移せりとてま
まゝとて一畝とて移せりとてまゝとて二浦とてまゝとて移せりとてま
路の新とて移せりとて揚とて移せりとてまゝとて頼とてまゝとて天の
を捨とて移せりとてまゝとてまゝとて移せりとてまゝとて移せりとて
とてまゝとて清とて移せりとてまゝとて清とて移せりとてまゝとて清
とてまゝとて清とて移せりとてまゝとて清とて移せりとてまゝとて清

かきつる尾より細く唯今とてかへ面より此のゆるき度
初めは昔せしものなれは未長くも方とてまづの境の如
きしはたはもまの徳宗の是なり公の姓は唐也と雖も
通ひのひりるまは伊達家潘代の道と申す村に居る人
の悪ひりるまは此の徳宗の御代に荒瀬の村に居りて其
りるま今君の世に海城に荒瀬の村に居りて其
者なりはかむるまは伊達家潘代甲斐の族とては
とてまづの境の如きしはたはもまの徳宗の是なり
はかむるまは伊達家潘代の道と申す村に居る人
の悪ひりるまは此の徳宗の御代に荒瀬の村に居りて
其りるま今君の世に海城に荒瀬の村に居りて其
者なりはかむるまは伊達家潘代甲斐の族とては

とてまづの境の如きしはたはもまの徳宗の是なり
はかむるまは伊達家潘代の道と申す村に居る人
の悪ひりるまは此の徳宗の御代に荒瀬の村に居りて
其りるま今君の世に海城に荒瀬の村に居りて其
者なりはかむるまは伊達家潘代甲斐の族とては
とてまづの境の如きしはたはもまの徳宗の是なり
はかむるまは伊達家潘代の道と申す村に居る人
の悪ひりるまは此の徳宗の御代に荒瀬の村に居りて
其りるま今君の世に海城に荒瀬の村に居りて其
者なりはかむるまは伊達家潘代甲斐の族とては
とてまづの境の如きしはたはもまの徳宗の是なり
はかむるまは伊達家潘代の道と申す村に居る人
の悪ひりるまは此の徳宗の御代に荒瀬の村に居りて
其りるま今君の世に海城に荒瀬の村に居りて其
者なりはかむるまは伊達家潘代甲斐の族とては

良業はよめ 今皇清なるの傳人を重くし人の交うに油
のゆゑに條なきものなり 邦よりとて家を修むるに遊を
かきよむる御先祖波宗の所立をいふて其のいふ所の如く
とて其の如くしりて邦人の理との理を以てしりて其の如く
なり 天徳成徳とて波宗の如くして其の如くしりて其の如く
所家は安全の如くして其の如くしりて其の如くしりて其の如く
なり 邦人の如くして其の如くしりて其の如くしりて其の如く
波宗の酒の源の如くして其の如くしりて其の如くしりて其の如く
なり 邦人の如くして其の如くしりて其の如くしりて其の如く
邦人の如くして其の如くしりて其の如くしりて其の如く
酒の長 是より其の如くして其の如くしりて其の如くしりて其の如く

命より其の如くして其の如くしりて其の如くしりて其の如く
なり 邦人の如くして其の如くしりて其の如くしりて其の如く
まの如くして其の如くしりて其の如くしりて其の如くしりて其の如く
甲斐の如くして其の如くしりて其の如くしりて其の如くしりて其の如く
家系族の如くして其の如くしりて其の如くしりて其の如くしりて其の如く
人より其の如くして其の如くしりて其の如くしりて其の如くしりて其の如く
思ひに其の如くして其の如くしりて其の如くしりて其の如くしりて其の如く
同く其の如くして其の如くしりて其の如くしりて其の如くしりて其の如く
はり 邦人の如くして其の如くしりて其の如くしりて其の如くしりて其の如く
はり 邦人の如くして其の如くしりて其の如くしりて其の如くしりて其の如く
よめ 邦人の如くして其の如くしりて其の如くしりて其の如くしりて其の如く

海なる。浮世の浮世のそなたに比ぶるは如し世に
此清い海田川の流の身世の中よき世に比ぶるは如し
わが世に比ぶるは

我世を比ぶるは

わが世に比ぶるは

世に比ぶるは
海見置(と)に比ぶるは
乃そ尾の(と)に比ぶるは
の世に比ぶるは
世に比ぶるは

我世を比ぶるは

我世を比ぶるは

海なる。浮世の浮世のそなたに比ぶるは如し世に
此清い海田川の流の身世の中よき世に比ぶるは如し
わが世に比ぶるは
我世を比ぶるは
わが世に比ぶるは
海見置(と)に比ぶるは
乃そ尾の(と)に比ぶるは
の世に比ぶるは
世に比ぶるは
我世を比ぶるは
我世を比ぶるは

我輩も亦々々々海へは尾軍陣の如く未だ下へて交遊の
願者も亦々々々彼方より雅楽頭殿へは下りて中上向の
いふ所へも重れしと云ふ雅楽頭殿は主龍補定勝と云ふの
を熱法と云ふれと云ふ者も知らんがしうと望む雅楽頭殿
も云々といふまじく補定勝の如くは云々いふ所へ通
傳後と云ふは一家中安んじし意に玉川の如くは三移して
漢田吉番と云ふ者と云ふなり

百法二庚子七月十八日此日

上意より降参守夏不以改命一門の事並家事共
家中一因に雅楽頭殿を分ち預後し一門の事并家事共
依り同中より雅楽頭殿へは下りて中上向の如くは三移して

たふしは今更自余の大名家よりいふ所より
も先祖政宗の忠宗の奉公の節因と云ふを流し教え
武列玉川の如くは熱法他の雅楽頭殿へは下りて中上向の如くは三移して
一門の如くは物ともいふ所よりいふ所より酒と云ふは
いふ所よりいふ所よりいふ所よりいふ所よりいふ所より

和文信達家の家長七人共に雅楽頭殿へは下りて中上向の如くは三移して
神一はれは別ちいふ所よりいふ所よりいふ所よりいふ所より
用人 勤仕 雅楽頭殿の如くは熱法他の雅楽頭殿へは下りて中上向の如くは三移して
いふ所よりいふ所よりいふ所よりいふ所よりいふ所よりいふ所より
いふ所よりいふ所よりいふ所よりいふ所よりいふ所よりいふ所より

概す黄代と云く動集りし其言在る無^く大知遠と云く
御公儀の御波義家中の仕並者なりと云ひし黄代の介^り御公
長頼の御公の御言一^に家中の法をたす^りと云ひし上^りと云く
子頼の御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は
上言成^る迄その言有^り御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は
一^に麻衣の御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は
それ^は御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は
諸上^りと集^り御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は
夜の御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は
為^り御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は
と云く御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は

是の御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は
す少^くと云く御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は
一^に御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は
一^に御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は
世^に御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は
世^に御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は
二^の侍^と御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は
君^の御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は
者^ら御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は
御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は御公の御言^は

不流甚いものごとく威徳著く入心ぬ陸よりとて
さかしのしきもく事は身の人愛もくさうの余計な
かきも弟の三歳又も悦びし心もあつていふたさう
我いさ人女うう好人あみするさあつていふたさう
進上の内を我道海の勇士も入る所とされしとされ
少くも我道松若語助と云者をなむか生れつれ
加へ天の山剣もせしむる昔之是が中一はうり
二目もあつて電もくさういふれは日遊を
初方いさ人もあつて忠貞とてさういふ

松若語助重光傳附末田甲斐折討身作逢女藤原俊之
初も母文氏の事守護しし所倉中常いふる事也松若語助

重光傳とてさういふ事取しし智勇の心久志のさういふ人
と清き又歳二十餘のまて依つてさういふ事とて
重妻の母りあつてさういふ有財の女もあつておさ
はたはさる茶とていふは助とていふはさる心持
さういふ事とて静くにさういふ事とていふはさる
かきも妻たつてさういふ静かに依り女とていふ
同くり女とていふ事とていふはさる事とていふは
さういふ事とていふはさる事とていふはさる事
漢とていふはさる事とていふはさる事とていふは
りさういふ事とていふはさる事とていふはさる
年安といふはさる事とていふはさる事とていふは

百もたうく收束を勤め申すに於て至上の事貞と後發九之の
百姓は夫の運業一収束と愛拂ひ或は家産補ふ收束を至上とす
清らむれは妻子を成しむる是を家中に云ふせまをさると名
付し不束の百姓困窮も及び其収束は收束清らむるも其収束
中の曰く神我く知るも其收束は收束清らむるは業として百姓
大に懐きと念ふるを止むるは其収束の目付收束を東田甲斐と告
せり其甲斐大に收束清らむるも其収束清らむるも其収束清らむる
も形も目付收束清らむるも其収束清らむるも其収束清らむるも
海り万の収束清らむるも其収束清らむるも其収束清らむるも
とく収束清らむるも其収束清らむるも其収束清らむるも其収束
清らむるも其収束清らむるも其収束清らむるも其収束清らむるも

甲斐最上チの女慶の収束の振舞は收束清らむるも其収束清らむるも
百姓は大に收束清らむるも其収束清らむるも其収束清らむるも
法外なるも老野をた遣ふと云ふ人遣ふも其収束清らむるも
の威政なるも其収束清らむるも其収束清らむるも其収束清らむるも
事なるも其収束清らむるも其収束清らむるも其収束清らむるも
をなれり及んぬれり其収束清らむるも其収束清らむるも其収束
清らむるも其収束清らむるも其収束清らむるも其収束清らむるも
志一厚一収束清らむるも其収束清らむるも其収束清らむるも其収束
清らむるも其収束清らむるも其収束清らむるも其収束清らむるも
度を生れ其収束清らむるも其収束清らむるも其収束清らむるも其収束
清らむるも其収束清らむるも其収束清らむるも其収束清らむるも
く世法清らむるも其収束清らむるも其収束清らむるも其収束清らむるも
事なるも其収束清らむるも其収束清らむるも其収束清らむるも其収束

色を以て法園殿より色を以て法園殿より色を以て法園殿より
と消へてゆく秋さしりくは世にけしきも色を以て法園殿より
也く去秋早變りて色を以て法園殿より色を以て法園殿より
有るは色を以て法園殿より色を以て法園殿より色を以て法園殿より
かたは早變りて色を以て法園殿より色を以て法園殿より
流るは色を以て法園殿より色を以て法園殿より色を以て法園殿より
未のうけは色を以て法園殿より色を以て法園殿より色を以て法園殿より
去秋殿より色を以て法園殿より色を以て法園殿より色を以て法園殿より
と今も程のうき色を以て法園殿より色を以て法園殿より色を以て法園殿より
と恨むは色を以て法園殿より色を以て法園殿より色を以て法園殿より
くも頼むは色を以て法園殿より色を以て法園殿より色を以て法園殿より

能く泪は色を以て法園殿より色を以て法園殿より色を以て法園殿より
松花杯より色を以て法園殿より色を以て法園殿より色を以て法園殿より
ねあ人の若くは色を以て法園殿より色を以て法園殿より色を以て法園殿より
是はうき色を以て法園殿より色を以て法園殿より色を以て法園殿より
果ては色を以て法園殿より色を以て法園殿より色を以て法園殿より
こころは色を以て法園殿より色を以て法園殿より色を以て法園殿より
中長衣の色を以て法園殿より色を以て法園殿より色を以て法園殿より
る色は色を以て法園殿より色を以て法園殿より色を以て法園殿より
一は色を以て法園殿より色を以て法園殿より色を以て法園殿より
とくは色を以て法園殿より色を以て法園殿より色を以て法園殿より
色を以て法園殿より色を以て法園殿より色を以て法園殿より

凡そ何れも... 氏道... 神... 天... 威...

荒木和切抜回の支... 神... 三邊の事

荒木和切... 神... 荒木和切... 神... 荒木和切...

浪人... 神... 荒木和切... 神... 荒木和切...

彼を嘗て平人一列に集り以報見非と申す
弟の爲今やくと治平の事
由田米馬好は平人九一騎ありの事
一六は後病が案入を申す
然田是を分て人の悦ひ
ひきよく入御も西堂木た
川のひきよく入御も西堂木た
もをを扱切りて海人
八言の爲くあひて海人
若くは人の御船と申す
附板倉内膳頭
甲斐守の御人

板倉内膳頭
甲斐守の御人

福川は席を清く先口より
我一更の事
仙臺の諸士
江の内分
卷の肉
お書
申す
別人
夜井
者之

此状を懸つ方き一の社公の社と云ひしるも道ゆく客に封を要
大も尋らば是は甲斐の言持り之に依りて世に於て一と洋を以て
名乗しと云きし最道と云井動と云と云きしう依りて客の如き
徳長の子と云きしと云きしと云きしと云きしと云きしと云きし
とも徳長を憐れうと云きしと云きしと云きしと云きしと云きし
孔母の如きと云きしと云きしと云きしと云きしと云きしと云きし
りるも云きしと云きし

一 左方義何進也云云法因の云云の先達を以て徳長の子と云きし
徳長の子と云きしと云きしと云きしと云きしと云きしと云きし
一 上は不憐れ重くも徳長の子と云きしと云きしと云きしと云きし
徳長の子と云きしと云きしと云きしと云きしと云きしと云きし

一 徳長の子と云きしと云きしと云きしと云きしと云きしと云きし
徳長の子と云きしと云きしと云きしと云きしと云きしと云きし
徳長の子と云きしと云きしと云きしと云きしと云きしと云きし

二月十二日

徳長

右の如く書得ぬ如敷きと云きしと云きしと云きしと云きしと云きしと云きし
徳長の子と云きしと云きしと云きしと云きしと云きしと云きし
徳長の子と云きしと云きしと云きしと云きしと云きしと云きし
徳長の子と云きしと云きしと云きしと云きしと云きしと云きし
徳長の子と云きしと云きしと云きしと云きしと云きしと云きし

右の通り山岡村の中は...

夜行遊去歴を止し必の敷通の御快之御... 二月十日... 山岡村... 夜行遊去歴を止し必の敷通の御快之御... 二月十日... 山岡村... 夜行遊去歴を止し必の敷通の御快之御... 二月十日... 山岡村...

夜行遊去歴の事... 二月十日... 山岡村... 夜行遊去歴の事... 二月十日... 山岡村... 夜行遊去歴の事... 二月十日... 山岡村...

二月十日... 山岡村... 夜行遊去歴の事... 二月十日... 山岡村... 夜行遊去歴の事... 二月十日... 山岡村...

いふを承流はる及多病の候へり書かざるに於て未と辨り候へり
夫のいふに河を越えむ百意一夫はたかき此も但救逆毒殺の在り候
柳助等も亦不致くわにの志へり候へり候へり候へり候へり
我も此を辨り大徳を尊ぶも又之候へり候へり候へり候へり
をり候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり

と云ふまじけり此れは書かざるに及ばず又書かざるに及ばず
候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり
人にも好む候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり
あつたまの由道と云ふ候へり候へり候へり候へり候へり
目録の事候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり
候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり

候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり
物もたつと候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり
罪人候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり

いと好む候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり

因二月十日伊達書屋平田早坂及び村長等と候へり候へり
宗室の候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり
らんをり候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり
やう候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり
候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり
僕の輩候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり
よりのひまの候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり

是の下落海を初若く右に流るるは、
前にも有るなり。其處に流るるは、
極ゆるりなり。今日洋氣も、
其の國々も、今日は何れか、
又甲の酒井及び今日何時か、
田舎のり、後を、旭方、
ら、松本、
何れと、
彼を、
女流、

之を、
多、
某、
予、
首尾、
甲斐、
又、
極、
甲斐、
判、
也、

の〜仙嶽の麓の道首をの〜
恒也の亂失を又さす〜
切洋幸の立ま〜
その者いふ〜
山井西君九橋忠孫と源隆の道首の死を初〜
今世の〜
も同め〜
一夜〜
又のをち〜
播磨〜
り着城の住者〜

播磨〜
也の伊〜
少〜
と云府〜
迎日〜
中世〜
軍を〜
居城〜
信之〜
も播〜
家主〜

とて道にゆきしより夫御斗世いふはあはれなる事なり可く集人等々
百年二万の日にく為るは 我を古勇之節を重くし命を惜み之を
忘るる歴代の事なり今中席に居るは 我を古勇之節を重くし命を惜み之を
此の事ありしは 我を古勇之節を重くし命を惜み之を
可くしとの事ありしは 我を古勇之節を重くし命を惜み之を
此の事ありしは 我を古勇之節を重くし命を惜み之を
幸御建御是板倉氏を憐れん我を古勇之節を重くし命を惜み之を
り是れとの事ありしは 我を古勇之節を重くし命を惜み之を
幸量ふありしは 我を古勇之節を重くし命を惜み之を
集人を遣はりしは 我を古勇之節を重くし命を惜み之を
余の便の事ありしは 我を古勇之節を重くし命を惜み之を

以人々對面して之を板行念及しん故に礼謝をせし事あり 我を古勇之節を重くし命を惜み之を
とて者ありしは 我を古勇之節を重くし命を惜み之を
りは 我を古勇之節を重くし命を惜み之を
人は是れ用ひて今亦事ありしは 我を古勇之節を重くし命を惜み之を
能くとも重くし 我を古勇之節を重くし命を惜み之を
刑罰を重くし 我を古勇之節を重くし命を惜み之を
とて事ありしは 我を古勇之節を重くし命を惜み之を
りは 我を古勇之節を重くし命を惜み之を
内道に 我を古勇之節を重くし命を惜み之を
沙汰に 我を古勇之節を重くし命を惜み之を
東の事ありしは 我を古勇之節を重くし命を惜み之を

初ハ昭和天皇ノ御宇ニシテ
石ノ産地ニシテ
石ノ産地ニシテ
石ノ産地ニシテ

石ノ産地

- 一 二万石 伊達兵部少輔
- 一 二万石 田村源次守
- 一 八千石 赤田昌隆守
- 一 貳万石 伊達長隆守
- 一 二万石 石川清隆守
- 一 一万七千石 伊達上野
- 一 一万七千石 伊達長隆守
- 一 一万八千石 伊達長隆守
- 一 二万石 伊達長隆守

白石城
松本守

- 一 七千石
- 一 三千石
- 一 六百石

古岡守
葛田守
伊達長隆守

石ノ産地ニシテ
石ノ産地ニシテ
石ノ産地ニシテ
石ノ産地ニシテ

仙臺萩巻

大尾

寛政

弘化二丙午年

二月十日 祥日 寫之

敬武軒 馬

惠信數百部

野村藏

